

## I 序章-空間よりも実体

昔の日本人は、一般に建築空間に対する造形状の関心が乏しく、実体的なものに興味を持っていた。

### 1 柱

柱をシンボルとして用いる。

1. 独立柱を立て、信仰や呪術の対象とする例
2. 棟を支える柱に象徴的意義を与える例
3. 人間や神を数える「幾柱」と唱える例  
→ なぜか

柱は構築物として最も単純で、エネルギーの率直な表現であるため、人間が自己の存在と力を外界に示すのに最も適した方法であるから。

### 2 人と神の同居

一方、空間への関心は極めて希薄であった。

古い伝統を伝える宮廷、神社や民間の祭りにおいて、人間の空間と神の空間といったような最も初歩的な空間区分さえも考えられることはなかった。

→ 神と人で空間的差別がなく、完全な神人同席状態であった。  
→ 原始の神々は極めて身近な親しい存在であった。

しかし、時は流れ歴史時代になると神とは恐るべき、近づくとべからざるものと考えられるようになった。  
この考えは後世まで引き継がれ、現在に至っている。

## II 彫塑的構成

実体的なものへの関心は大陸文化輸入期に入ると建築の彫塑的構成（＝独特の造形的性質が認められる全般的な性格）へと発展した。

### 1 主体の占有空間

中心になる建物の内部全体が、主体の占有空間としての性格が強くなる。周囲に回廊や垣根を巡らす場合、それらの内側の空き地までも主体の占有空間となる。

### 2 垣根としての回廊

回廊は大切な建物を取り巻いて、保護するとともに立派に見せるための垣根として機能する。

### 3 門の機能

回廊や垣根に開かれた門が内・外空間の交渉の場となる。

→ 門への要求

1. 一つの独立した建築物としての性格の要求。
2. 回廊内外の空間の性質の相違を強調することの要求。

### 4 汎神的世界観

＝神と人と物、または精神と物質との間に明白な境界がないという考え方。

＜この段階の空間構成の原理＞

- ・主体の占有する建物を中心とした同心円的な空間構成。
- ・一構えの群建築全体が主体の占有空間の性質を帯びる。
- ・中核をなす建物は、対称性・実体性の強い形態を持つ。

→ 汎神的世界観が建築の細部にまで及び、その結果、彫塑的建築構成が成立した。

## III 絵画的構成

奈良時代から平安時代に移ると人々の実体への関心は薄れた。

### 1 客体のための中庭

客体のための中庭空間が準備されるようになる。

→ 以前、回廊は金堂などの大切な建物を取り巻く垣根であったが、今では人間のための中庭を取り巻く垣根となった。

### 2 正面性の発生

彫塑的構成の特徴である四方対称性が次第に崩れ、造形上の関心が正面だけに集中するようになる。

＜正面性の要素＞

- ・間口が広く奥行きが浅いプラン
- ・前面吹き放し柱列などの前後非対称の取り扱いの発達
- ・来迎壁や脇障子などの背後を遮断して正面を強調する工夫

### 3 鳳凰堂式プラン

中央に主建築があり、その左右から翼廊が出て前方へ直角に折れ、コの字形となり、その屈折点上に二つの楼閣をのせた左右対称の構成である。

→ 正面性を極度に発展させたプラン

＜造形的特色＞

- ・一枚のキャンバスのように扁平である。
- ・色彩と陰影の効果を追求する。

### 4 二元的世界観

平安朝の人々の精神的傾向を最もよく代表しているものは浄土思想である。  
→ 浄土思想は当時の社会全体に普遍的な思想であり、幅の広く底の深い民族精神史上の動きであった。

浄土思想は自己の住むこの世界の他に第二の理想的な世界を想定し、しかもこれを感覚的に捉えようとした。

→ 第二の世界とはわれわれの周囲にあるような「手でつかむ」ことのできる物体ではなく、「眼にみえる」ものである。  
→ 色彩と陰影の世界であり、絵画によって最も適切に表現される世界。

鳳凰堂の示す華やかさや美しさに伴う一種独特の弱さと儂さは、このような精神的背景を考えることによって、初めて理解することができる。

## IV 内部空間の展開

### 1 内部空間発展の要素

建築の内部空間の発展の最も一般的な要因は「付加」と「分割」である。  
「付加」→ 庇 → 内部空間を拡張する手段  
「分割」→ 隔 → 内部空間にさらに内部を生成する手段

### 2 客体のための内部空間

客体のための完全な内部空間が形造られるようになる。  
例) 寺院の礼堂、神社の拝殿 など

礼堂には2種類あった

1. 主な堂（正堂と呼んでいる）とは別棟をなす礼堂
2. 正堂の屋根を前へ葺きおろした前庇を礼堂とするもの

拝殿の前身と考えられるものは三つある。

1. 礼殿
2. 舞殿
3. 中門と翼廊

### 3. 複合内部空間

二つの性格の違った空間が合体して一つの空間となり、前方部を外陣、後方部を内陣と呼ぶ形式に到達する。  
→ 一つの建物の中に性質の全く違う二つの部分ができる  
→ 本当の意味での複合内部空間が誕生。

住宅においては寝殿を、公式の場合に用いる晴れの空間とプライベートな寝の空間とに区画することで建物を東西、南北あるいは十文字に仕切るプランが成立する。

### 4. 内部空間の自律

中世を通じて建築空間の考え方は建物のプランについて構造からきた単純な矩形の枠を否定し、内部の要求にしたがって自由に展開する傾向を持つようになった。

仏堂においてもその傾向は見られ、礼拝者の空間を広くするため、礼拝対象をできるだけ後退させる。  
→ 仏堂は実は仏のための堂ではなく、人間のための堂に変質した。

<住宅における内部空間の発展の要因>

- ・突出した廊
- ・建物と建物との結合方法の変化

→ もはや住宅のプランは古代の神殿のように長方形の枠に縛られることはなく、各室が自由な大きさを持つことができる。室を大きくしたければ他に構わず突出させれば良いし、またあるときは自由な動線に従って結合することができる。  
→ 内部空間の真の自律性が獲得された。

### 5. 空の思想

中世の人々は空間に対して今までにない深い関心を抱くようになった。すなわち実体そのものよりも、その実体によって囲まれた内部空間に対する関心である。

人々の心は実体的なものから次第に遠ざかり、物質的なものへの執着を絶ち、ひたすら空や無の世界に向かったのであった。

## V 幾何学的空間より行動的空間へ

### 1. 幾何学的空間と行動的空間

<幾何学的空間>

- ・解析幾何学の平行座標系や極座標系などで表し易いような形態で構成される。
- ・各構成要素と次kあるいは極との位置関係、すなわち座標が重要である。
- ・各構成要素を同時に観照するために、見晴らしや見通しが大切である。

<幾何学的空間>

- ・解析幾何学の平行座標系や極座標系などで表し易いような形態で構成される。
- ・各構成要素と次kあるいは極との位置関係、すなわち座標が重要である。
- ・各構成要素を同時に観照するために、見晴らしや見通しが大切である。

<行動的空間>

- ・解析幾何学で扱うような各構成要素の位置関係（すなわち座標）は重要ではなく、位相幾何学で扱うような接続関係が重要である。
- ・各部分空間が継続的に観照される点に特色があり、造形的には動線の屈折や視線の遮断によって継続的観照を誘う。
- ・観照の際は実際の歩行にせよ、観念上の運動にせよ、つねに観照者の行動が前提となる。

### 2. 幾何学的空間の崩壊と行動の表現

古代寺院の伽藍配置や宮殿・住宅の構成、条坊制都市などはすべて幾何学的空間の産物であった。しかしこれらは古代末から中世・近世へと時代が下るにつれて崩壊し、個々の建築物は座標系の枠から開放されてゆく。

### 3. 屈折と旋回

個々の建築物が座標系の枠から解放されたことにより、人間の運動の表現があらわれる。

- ・動線をわざと屈折させ、あるいは旋回させる。  
→ 例) 書院造り邸宅のL字形・コの字形の間取り、雁行状の建物配置

### 4. 流動的世界観

日本の運動は「紆余曲折」する点に特色がある。そしてこのような紆余曲折する運動の精神的背景は最もよく「無常観」の思想に見出すことができる。それは世界を時事刻々変化してとどまらない「流動的」な現象とみなすものであり、中世以後の日本人の精神の貴重であり、これがまた、日本独自の建築空間をも生み出したと考えられる。